

中国民主化の火は消えず

ウアルカイシ

万潤南

中嶋嶺雄

◆特別座談会◆

◎—高まるカントリー・リスク

中嶋 去る十二月十六日に、東京で行われた民主中国陣線（中国民主連合）の日本支部結成大会には、中国当局や駐日大使館筋の様々な干渉にも拘わらず三五〇人前後の人々が参加しました。当日の集会に参加したくてもできない立場の人びとも多かったはずで、中国民主化運動に対する支持基盤が日本にいる中国人の間にも大きく拡がっていることを示しています。



中嶋嶺雄氏 東京外国語大学教授。現代中国学、国際関係論専攻。一九三六年松本市生れ。東京外国語大学中国科卒。東大大学院修了。社会学博士。著書に『北京列強』『中ソ対立と現代中国の悲劇』等。

す。またまた同じ日に中国民航機乗っ取りという衝撃的な事件がありました。この事件も天安門事件の深刻な後遺症だと考えていいでしょう。

実は私自身十一月の下旬に中国を訪れ、六・四事件以来初めて天安門広場の現場に行ってみました。あたり一帯に残る緊張した雰囲気に触れて、なぜ今もって北京の戒厳令が解除できないかが非常によくわかりました。私の見るところ、



(中国民主化の火は消えず(『中央公論』1990年2月号-1990.02)



ウアルカイシ氏 一九六八年北京生れ。ウイグル族。八八年北京師範大学入学。翌年北京大学自治連合会主席として民主化運動の先頭に立つ。指名手配された。民主中国陣線を作って、現在副主席。在米。

現在の中国社会には、人民の側のある種の抵抗戦線がいろいろな形で出来ていると思います。中国民衆のあいだ、とくに学生や青年にある鄧小平・江沢民体制への強い反発を感じました。

万潤南 ハイジャック事件の背景に天安門事件があるというのはその通りでしょう。最近では十二月九日の学生救国記念日に、三〇人あまりの学生が北京放送局前で、「どうして中国はこんなに貧しいのか」というスローガンをかかげてデモ

をやりました。

現在中国政府は二つの大きな問題に直面しています。一つは国民の不満、もう一つは経済のダウンです。この二つには密接な関係がありまして、経済上の不正に対して国民は天安門広場に結集しました。ところが政府はその国民の不満な気持ちに対して戦車・機関銃で対応した結果、国民の不満はさらに強くなり、そして現政府に協力しないということ、経済がさらに悪くなっています。

経済面での主な問題は次の五つです。まず第一は経済全体がいま下向しつつあることです。この十月には成長率がマイナス二・一パーセントになったほどです。政府の支出はふえましたが収入が減った結果、インフレが起って、現在ではその率が三〇パーセントにもなっている。八九年の上半期に李鵬首相はインフレ率を何とか一桁にしようと宣言したにもかかわらずです。そして李鵬政権が引締め政策をとることで、末端の各組織、



万潤南氏 一九四六年江蘇省生れ。七〇年清華大学卒業。指名手配以前は、中国でのハイテク産業の中核である北京四通集団会社社長として経済改革と民主化運動に貢献。現在民主中国陣線の秘書長。在仏。

企業は大変深刻になっています。また、農民から食糧を買うのに払うお金がないので手形で払っている。政府はこの局面を打開しようとして、八九年末までに一千億元の人民元を新しく発行しようとしています。するとまたインフレが加速する。

ウアルカイシ 中国政府は八九年に六百億元とっていますが、実際には二千億元も人民元を増発しており、この年末には一度に一千億元も発行するのだから、

わたしたちが中南海に潜って老人たちを殺すことはできません。しかし、民主中国陣線が存在していること自体が中国共産党に対してはひとつの威圧なのです。独裁政治を批判、非難し続け、それを孤立させてゆきます

こんな状況は国民党が大陸から台湾に逃げる前と同じようなもので、国民の生活はますますみじめになっています。

万潤南 次は債務問題で、世界銀行の一番低い見積りでも中国の債務はいま二百四十億米ドル、実際はこれ以上でしょう。中嶋 私は四百数十億米ドルと推定していましたが、つい最近、中国当局の発表では四百億米ドルを超えたそうです。

万潤南 しかもそれには利息の増額分が試算されていません。さらにレートの問題があって、実際の借金は倍くらいになっている。以上は対外債務ですが、これに加えて第三に国内の債務があります。これは国民の給料の中から天引きで強制的に国債を買わせているというひどい有様で、その額は八百億元にもなっています。第四に信用の問題があります。アメリカの銀行筋の評価でも中国のカントリー・リスクはいま急激に高まっています。

最後に問題なのは引締めという経済政策がそもそも間違っていることです。しかも国民はもう何も信用しなくなりましてから、引締め効果も疑問です。

改革をいっていても、さらに重大な二つの問題に彼らは触れなかった。一つは政治改革で、一党独裁を終えて、政治的多元化を実現するということが、もう一つは根本的な所有権の問題です。中国ではこの二つの問題が解決されない限り何も始まらない。従って、学生たちの目標と、党の政府内の改革派の目標は一致していません。学生の目標は最初から政治的なものでした。つまり、共産党の一党独裁を終らせることだったのです。一党独裁があるからこそ「官倒」も発生するので。ところが趙紫陽たちには政治問題を登場させるのは早すぎたでしょう。趙紫陽はあくまで体制内の改革派、学生たちが望んだのは体制そのものの改革でした。ただ私の感觸では、最終段階では、趙紫陽自身、政治問題の所在を認めなければならなくなったのです。そのかぎりで学生とはある程度の連合ができる。ただし連合といってもあくまで「ある程度」のもので完全な一致ではありません。中嶋 党の最高指導部のなかでの胡啓立（当時、政治局常務委員）の役割について伺いたいのですが、三年前の民主化運動

それに、地方との力関係も変わりました。昔は中央がしっかりと地方をコントロールしていた、引締めようと思えばできたのですが、今ではいくら中央がやろうとしても、地方は相手にしません。

中嶋 引締め政策をやるには一方で政治改革をやらねえといけな。民主化も抑えて引締め政策をやるのでは、国民は何の意欲ももてなくなります。ところで万潤南さんは中国共産党十三回大会の趙紫陽報告にあった沿海地区経済発展戦略というのをどう評価されていますか。

万潤南 私はあの草案に直接かかわってはいませんが、とてもいい経済政策だと思う。中国は広いので、各地方に同じような大雑把な政策を出してもしょうがない。地方の発展のベースに応じてやる方がいいですね。中国経済改革のグループには「三・五・八」計画というのがあって、三年、五年、八年の中長期計画ですが、スローガンとしては政府の干渉はできるだけ小さくして市場原理によって企業を発展させるというものです。それはよかったのですが、欠点としては、中国で一番肝心の財産所有権の問題をみな避

のときも胡啓立は最後にくだけてしまいましたね。彼は学生運動のリーダーということではウアルカインさんの先輩ですが、いつも日和見主義的で決定的な役割を果たさなかったと思うのですが……。ウアルカイン 全く同感です。学生や市民たちが勝ちそうになった段階では、胡啓立は学生に賭けようとしたところが見えただけで、軍隊の虐殺が起るとまたすぐ変わってしまった。人格的には感心しません。

中嶋 民主化運動というのは単なる民主化ではなく、「反・革命」(Counter revolution)、いわば革命権力への対抗だと思わうですね。民主化が同時に反共産党にならざるを得ないことはまさに東ヨーロッパで今起っていることです。「もう共産党ではだめだ」、「もう社会主義ではだめだ」という問題意識が今回の中国の民主化運動の底流にあったのではないかと私は見ていました。

ウアルカイン 私たちの目標は、あくまで一党独裁の体制を終わらせるということです。つまりどの党を支持するかは選択の自由を国民に与えることです。だから

けて通ったことです。

◎中国での血の犠牲の衝撃

中嶋 ウアルカインさんに伺いたのですが、去年の五月十六日に、趙紫陽総書記がゴルバチョフ書記長と会見し、「中国ではすべての重要な決定は鄧小平同志にゆだねられる」という党の十三期一中全会の秘密決議を暴露しましたね。その瞬間から、民主化運動と党内の権力闘争が結びついてデモがすごく大きくなっていった。あなたや王丹さんが李鵬首相とやりあった直後に、趙紫陽は天安門広場に降りてきて「いま自分はここに来るのが遅すぎた、あなたの方の要求は当然だ」と言いましたね。こうして鄧小平・李鵬にとってきわめて深刻な状況が生れ、戒厳令、そして血の弾圧とつながっていくのですが、あなたがたは当初、趙紫陽も「官倒」(官僚ブローカー)の一人として批判していました。この経過を振り返って、趙紫陽の政治的役割をどう考えますか。

ウアルカイン 趙紫陽と胡耀邦に対しては、その経済政策については学生たちは感心していました。ところがいくら経済

らもし共産党が私たちの運動を「反革命だ」といいたいのなら、仕方がない、言わせておくまでです。(笑)

万潤南 中国にはいま「四つの堅持」といわれるものがあって、その中には「社会主義の道を歩め」とか「共産党の指導を堅持しなければならぬ」というものがある。社会主義の道を歩むというのは、経済面ですべての国民をコントロールしようということですし、それは必然的に生活レベルの低下をきたしました。そして共産党の一党独裁こそが中国の政治の不安定をもたらしている。この二つを打破しない限り中国はこれ以上発展できない。だからこそ学生運動が爆発したわけで、これが鄧小平のいういわゆる「小氣候」です。

ところで中嶋さんがさきほどおっしゃった「反革命」という定義については、私はちょっと違う考え方をしています。いわゆる「革命」というのは歴史の自然な成り行きに應じることをいうので、それに逆らって阻止するのが「反革命」です。今、学生や市民たちが求めているのは、まさに歴史の成り行きに沿って

いるのですから、これこそが「革命」であって、「反革命」は鄧小平のほうです。

中嶋 私の言おうとしたことも同じこと、十一月にはソ連にも行きましたが、共産党独裁、社会主義・共産主義ではもうだめだということから東欧が内部から崩れていったことは間違いない。ソ連は巨大な国だから簡単に急激な変化はないものの、やがていつの日かソ連も同じようなことになるかもしれません。

一方、中国については、「中国は農村も変わらないし、農民は民主化運動に冷たいではないか。近代化もまだできていないし、そういうところでは一党独裁体制が続くのではないか」という意見がありますが、いまや状況は大きく変わっていますが、私には東欧情勢やソ連の変化が中国に与えるインパクトは非常に大きいと思う。それに、日本をはじめ韓国、台湾のようなアジアNIEsの経済的活力が中国に与える影響は、特に沿海地区では大きなものがあるし、この二つの巨大な圧力にたいして江沢民体制では

とても耐えられないだろうと思う。

その場合、ある意味で客観情勢はあなた方に非常に有利です。ただ、中国にとっては残念なことだったのですが、東欧諸国があつという間に変わったのも、天安門事件という中国での血の犠牲の上に、その衝撃と影響の上に成りたつていると見られることです。ただ将来もう一回中国で大きな民主化運動が起つたときに、東欧やソ連の情勢をみて、中国の権力者たちが、果たして再び銃撃でそれを抑えることが可能だろうか。全くないとは言えませんが、非常に難しいと思われる。その点を考えると、中国の民主化、というより、より大きな中国の将来の新しい国づくりには必ずや未来が開かれると思います。

万潤南 二つ問題があります。一つは農民の問題ですが、先ほどのような考えが出てくるのは中国の農民のことをあまり理解されていないで、ちょっと低く見ておられるのではないのでしょうか。私の考えでは、中国の将来の改革を一番考えているのは農民階層です。この十年の改革で、農民は大きな利益を受けて、農村が

大きく変わりました。そして逆に今、一番打撃を受けているのもまた農民です。

というのは農民が豊かになったのは郷鎮企業のおかげなのに、今度の李鵬政権の引締め政策はまず郷鎮企業に深刻な打撃を与えているからです。つまり郷鎮企業に対して原料、エネルギーを提供しないし、市場も制限しています。これは農民の生活に大きな悪影響を与えるのです。

それから、今、多くの農村から余った労働力が都市に流れてきて、建設業にたずさわっている。ところが、都市での四百億元にものぼる建設の仕事が引締められると、四千万人の農民が仕事を失うこととなります。すると彼らは多分鉄道に沿って、南は広州、西北はウルムチ、東北は東北北三省にまで散っていく。彼らは引締め政策の犠牲者であり、天安門事件の際、広場で軍用車やタンクに火をつけたのは、大部分は都市に流れてきたこのような農民でした。

三番目の問題はすでに触れましたが、政府が農村から食糧を買い付けるのにお金を払わないで手形決済をしていることです。しかも軍隊を使って食糧を徴集し

ており、四川省ではすでに農民が食糧を

集めに来た軍人を殴ったという事件まで起きている。さらに農業生産に必要な肥料やプラスチックなどの材料の値段がどんどん上がり農民が困っています。工業の方でも、物価が上昇しているのに、賃金は逆に下がり、ボーナスは停止されているので、都市の労働者はみな不満をもっています。彼らは「次の民主化運動が起つたら、私たちはそう簡単に妥協しないぞ」とはつきり言っている。ですから、私の考えでは、もし次に民主化運動が起るときは、農民と労働者が多分一緒に立ち上がるでしょう。

もうひとつ、昨年の天安門事件で、すでに共産党内部と軍隊内部の分裂が起つていますし、予測しなかった国際世論の反対ということもあります。ですから私たちはここで日本政府や西側政府に訴えたいのは、こういう時期に、もし経済制裁を緩めると、結果としては中国の民主化運動に打撃を与えるということです。

◎—中華思想からの脱却

中嶋 東欧との関係について、ウアルカ

イシさんはどう考えますか。私は天安門事件のあの犠牲があつて世界を驚かせたが故に、ルーミアニア以外の東欧諸国では一滴も血を流さずに民主化が大きく進んだと思っています。逆に、東欧の民主化が進む状況の中で、もう一度、中国の民主化運動が起れば、万潤南さんの言う通り、それをもう一回銃撃で弾圧することは困難でしょう。あなたの方の運動の成功の鍵もそこにあると思うのですが。

ウアルカイシ 中嶋さんの天安門事件と東欧情勢の関連についてのお考えには賛成です。そして、中国で次に起る民主化運動は、もっと大規模なものになり、ゼネストに入るでしょうから、中国政府の権力は根底がゆらぐことになり、鎮圧の可能性は少ないと思いますね。

中嶋 私は、昨年の八月終わりに民主中国陣線の主席になった敵家其さんとバリエで会いました。そのときに「専制の終結・人権の擁護・共和国の再建・連邦制の創造」が民主中国陣線のスローガンだと彼は私に書いてくれました。私は中国人のあいだに初めてこういう考えが出てきたことを、高く評価したのです。

というのは、単なる民主化あるいは単なる共産党批判を超えて、中国の将来はどうあるべきかを模索してこそ、あなたの方の運動が多くの人たちの支持を得ると思うからです。このスローガンを見たときに、孫文がかつて外国で亡命しながら運動をしたときのような感じを受けました。このスローガンを、民主中国陣線は今後も掲げていくのですか。

ウアルカイシ 表現の仕方でも多少ニュアンスが異なっています。そのスローガンは十六文字に集約されているけれども、現在では二十四文字です。つまりもっと具体的に、科学的になつていきます。

中嶋 今度の民主化運動を通じて、初めて中国人が——あなた方がまさにそういうスローガンを掲げているのですが、二十四文字の方は「基本的人権の保障、社会的公正の擁護、民営経済の発展、一党独裁の終結」とより具体的になっていますね。いままで中国の人たちは、近代化といつてもどうしても長い歴史と伝統があつて、漢民族中心主義というか、中華思想というものから脱却できなかった。

国際共産主義運動とか社会主義運動でも
そうで、毛沢東も鄧小平もそうなので
が、やはり中華思想的な集権主義の特色
を非常に持っているわけです。

この中国的な特色は、ある意味で中国
がひとつにまとまるときに大切なバック
ボーンであったと思いますけど、同時に
近代化を妨げてきた最大のガンなので
す。この中華思想から脱却しない限り、
中国の民主化も近代化もあり得ないと私
は思います。

今回、はじめてそういう壁を乗り越え
ようとする動きが出てきた。たとえば、
チベット問題ですね。「チベットは、当
然漢民族の支配下に置くべきだ」という
ような認識があると思うんです。今回の
「民主化」という問題を突き進めていけ
ば、チベットの人たちの境遇にも共感を
覚える、という意識が出てくる。

昨年の五月十九日、中国の民主化デモ
の陰にあってあまり報じられなかったけ
れど、ウラムチで大変深刻な民族反乱が
ありましたね。まさにウアルカイシさん
はウイグル族ですが、ウイグル族のこの
反乱は、あまり伝えられてないけれど

というよりも、中華思想だと思っています。
中嶋さんの考え方には、ある程度賛成し
ます。つまり、各地方それぞれの経済的
な特色によって経済地区はできるのです
けれども、それが違った国になるとか違
った経済体制になるということにはつな
がらないと思います。

将来の発展の目標は、形式の上では連
邦制です。連邦制というのは、地方の自
治権を強めて、中央の集権を弱めること
です。

ウアルカイシ いま、世界中で大きな出
来事が起こりつつあります。そのひとつ
は、一九九二年にヨーロッパの統合がで
きることです。これは、とても意味が大
きいことです。ヨーロッパでは何百年も
お互いの戦争を戦ってきたけれども、結
局は妥協しあって、みんなひとつの国に
なろうとしています。ただ、私たち中国
の場合は、こういうことを言うチャンス
も権利もいまはないんです。中国人にと
って、いまの段階で重要なことは、まず
こういうことを言えるような雰囲気、社
会体制をつくることです。

中嶋 私は、二十一世紀までとてもいま

も、チベット同様に重大問題です。

そういうことからすると、これらの問
題も考えていかなければいけないし、そ
れからいまの台湾の人たちの立場も十分
考慮して中国の将来を考えていかなけれ
ばならない。あるいは、モンゴルの人た
ちの問題もそうです。そういうことをあ
なた方は今後、運動の中には非念頭に入
れていってほしいと思います。そうでな
いと、いわゆる漢民族中心の運動になっ
てしまつて普遍性をもたなくなる。

その場合に、やっぱり将来は連邦制の
ような形態を考えていかなければ、中国
の近代化、中国の発展は無理じゃない
か。一党独裁は解体したけれども、ひと
つの中央集権的なシステムだけで、しか
も漢民族中心の中華思想でやっていくと
いうのでは、本当の中国の発展はないと
私は思います。ソ連でも民族反乱が各地
に起こりつつあって、ますますその力が
強くなっていると思いますが、そういう
現状に照らせば、中国は将来、緩やかな
連邦制をとり、チベットにも完全自治を
与えるべきであつて、台湾は台湾でいま
のままでもいいと思うんですね。あるい

の江沢民体制で中国を支えていくことは
できないと思います。世界は、ますます変
わります。他方、中国周辺のアジアはま
すます発展します。そうした中で、スタ
ーリン式の社会主義体制を中国や北朝鮮
が固守しようとしても、これはまさに時
代の流れに逆らうことです。

しかしながら、皆さん方は、残念なが
ら国外に脱出せざるを得なかった。そう
した厳しい状況の中で、国外の運動と国
内の抵抗運動、あるいは自然発生的な
いろいろなレベルの国内の運動と、どうや
って連携していくのか。その点は、いか
がですか。

万潤南 私たちはいま国外にいますが、
実際のいま世界は情報社会になっているの
で、私たちの運動は何らかのルートで国
内に伝わります。一つは民主中国陣線
で、あとはVOAやイギリスのBBC放
送、そのほかには香港や台湾の中国語新
聞によっても伝えられています。

中嶋 チベットのダライ・ラマ十四世が
ノーベル平和賞を受けたことに、中国当
局は大変反発しました。しかし、日本人
にはかなり共感をもった人たちが多かつ

は、香港は広東語経済圏として広州、深
圳をひとつにまとめるのか、福建省も台
湾と一緒に福建語の経済圏をつくるの
か、東北にはひとつの経済共同体をつく
ってゆく。そういう広域の連邦地域がお
互いに経済発展と民主化で競争しあうよ
うな活力が出てくれば中国にも希望があ
ると思います。今後の中国改造論に際し
て、とくにいまの中華思想的な中国から
いかに脱却していくかを考えるべきだと
いう点については、どうでしょうか。

◎「国家」という概念の解体

ウアルカイシ 中国での大きな問題は、
漢民族であれ、チベット族であれ、ウイ
グル族等の少数民族であれ、何か要求し
ようと思うと、すぐ「黙れ」と口を封
じられる一党独裁の境遇の中では何も言
えないということです。

こういう状況が起こったのは、漢民族
中心主義と中華思想が原因であり、もう
ひとつはナショナリズム、国家を全体化
して守ろうとしていることです。

万潤南 ウアルカイシさんの補足ですけ
れども、主な原因は、漢民族中心の思想

たと思っています。民主中国陣線にはチベッ
ト亡命政府の人たちも一緒に運動に加わ
っているそうですが、この問題はどうか
考えですか。

万潤南 バリでは、ウアルカイシ君もダ
ライ・ラマさんと会いました。また最
近、厳家其さんもダライ・ラマさんと会
っています。いまお互いに基本的人権と
民主化を求めようとしていることではま
ったく一致しています。基本的人権がな
ければ政治の民主化はできない。

ただ、将来も民主化が実現したらど
うなるかといえば、まったく民主・平
等・自由の前提の下で、それぞれの民族
の一人一人の自由、一人一人の選択に任
せて決めるべきです。けれども、いまの
段階ではこういうことを言うのはまだ時
期尚早です。というのは、政治の民主化
が実現されなければ、民族の問題もぜん
ぜん考えることができないからです。

ウアルカイシ ダライ・ラマさんと会っ
て、強く印象を受けたのは、何十年間ず
っと平和と非暴力を貫き、理性という方
法で戦って、自分の民族に対する誇りと
自尊をもっていることです。

いまのチベット問題は少数民族の問題ですが、二つのことがあると思います。

一つは、極端に独立を主張すること、どうしても自分たちが漢民族と一線を引いてやろうという地方的なナショナリズムは、あまり賛成できない。かといって、逆にも漢民族の側からどうしても一つの国に入らないとだめだと、大きなナショナリズムをもって小さなナショナリズムを抑えようとするのも賛成できない。

ダライ・ラマさんはそれほど極端に独立ということを強調していません。チベットは独立の地域としては存在すべきですけれども、独立国家になるべきだとまで言っていない。独立地域として、まず自分たちなりの権力や習慣は守るべきです。漢民族とはお互いに兄弟の関係でいくべきだという考え方だと思います。

中嶋 ソ連でもバルト三国なんかは、フィンランドのような形で生まれ変わっていく可能性はある。しかしながら必ずしもソ連と対立することはないという形になっていく可能性がありますが、要するに中国でもソ連でも少数民族に対する抑圧

は、一日も早くなくならなければいけないと思います。ウアルカイシさんはウイグル族ですが、新疆ウイグル自治区にもあてはまるのではないのでしょうか。

ウアルカイシ 私が大変悩んでいるのは、どうしてもみんな必ず「独立しなければならぬ」と言うのか。あるいは「絶対独立してはいけない」と、問題を極端にみなければならぬのか、という点です。つまり、いろいろな人間の社会を見るときに、「国家」という概念をとりはずせばいいんじゃないかと思っています。

「絶対独立してはいけない」という考え方の裏には「おまえは私に属するものだ」という支配的な考えがあります。それは、とても反動的な考え方です。一方、「どうしても独立しなければならぬ」という考え方もよくない。これは、いまの世界の「連合」という成り行きに反しているものです。

私たち人間にとっていま忘れるべきものは、「独立」という言葉です。そのことと自体を一応忘れて、もっと人間が、まずその地方の人たちにそれなりの権力を

ていまの李登輝民主体制へと、めざましい政治発展を遂げています。その台湾にとって大きな問題は、十二月初旬の地方選挙にも見られたように、政治的多元主義が実現していることです。

台湾はいま、外貨準備高も世界第二位と非常に大きく、大変豊かになってきています。従来の台湾に対するイメージは根本的に改める必要があります。中国の民主化のためにも、中国経済の発展のためにも、もっと広い意味で台湾とのいろいろな形の連携が必要だと思っています。

万潤南 中嶋さんのおっしゃったことは、大部分賛成できますが、問題は、大陸において、中国共産党の一方独裁があることであり、共産党はいまだに「武力解放」の放棄を明言していません。台湾の「国際化」がもし明らかに叫ばれると、武力を行使すると言っています。共産党の性格からすると、これは言葉だけではなくて、本当にやるかもしれない。特に現在の状況の下で、経済がダウシして、国民の不服がつのるという状況下では、共産党がみんなの視野を外に向

けさせるために、よけいに武力行使をする可能性ががあります。つまり「台湾が祖国を分裂させようとしている」、民族を分裂させようとしている」という口実で武力行使する。というのは、こういう口実は、中国大陸ではまだ相当の支持を受けられるのです。

たとえば、今度の台湾の選挙でも、候補者の「台湾独立」の言論に対して、『人民日報』では七回も批判の文章を載せました。ですから、台湾の人にとって重要なことは、いまはもっと大陸での民主化運動を支持してくださることです。大陸で共産党の独裁がなくなり民主化が実現したら、その上でまた統一も考えられると思います。

中嶋 最後に一言申しあげたいのですが、厳しい状況のなかで運動を持続することは、大変にしんどいことであり、権力者や勝者に迎合する者も出てくる半面、運動者の内部にも自己解体の兆候がつねにあるわけで、ある程度リラックスしてやっていかないと永續きはしないでしょう。

与えて、その平等な状況の下で、共同で自由に自分の故郷を建設していくという雰囲気をつくらなければいいのです。

中嶋 ウアルカイシさんはまだお若いのに、ナショナリズムというものの基本的な重要な原点をおさえている点で、大変感銘を受けました。ダライ・ラマにしても緩やかな連邦制、それから方法はあくまでも非暴力というところに大きな意味があると思うんです。できれば、そういう方向を貫いてほしいと思います。

◎共産党独裁政治の孤立化へ

中嶋 もうひとつ重要な問題を論じたいと思いますが、それは台湾の問題です。最近の台湾は非常に大きく変わっていることを、ぜひ認識してほしいと思います。

かつては、台湾というと蔣介石独裁とか、反動とか、反共とか、そういうふうにとらえられていましたが、台湾は蔣介石独裁体制から蔣経国権威主義体制を経

ウアルカイシ 私の見ている限りでは、大多数の人たちが相変わらず民主化運動を支持しています。一部の人たちが何を考えるのか、それはそれらの人たちの自由であり何とも言えませんが、世界各地で中国民主化運動が絶対多数の民衆から支持を得ているということは、私たちにあっては心強いことです。

正直に言って、私たちは国外にいるために、できることは限られています。私たちが中南海に潜って老人達を殺すことはできないし、実際に軍備ももっていないので、そういうことはあり得ません。ただ、民主中国陣線が存在していること自体が中国共産党に対してはひとつの威圧なのです。外で世界人民に支持してもらうことと、中国の独裁政治に対する批判、非難を続け、独裁者を孤立させることが、いまの私たちの民主化運動にとっての当面の仕事であり、そのことが次の国内の運動を盛り上げるための準備になると思います。

中嶋 ありがとうございます。どうか頑張ってください。